

2022年7月に実施された噴火湾沿岸の環境調査結果で、森（7/4, 7/20）、八雲（7/20）、虻田（7/6, 7/26）、伊達（7/28）の水温・塩分の観測結果をとりまとめました（本情報は函館水産試験場のHPからもご覧頂けます <http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/hakodate/>）。

## 【水温・塩分の鉛直分布と有害プランクトンの出現状況】

本年7月はまとまった降水が多く、水深5m以浅のごく表層で塩分が30を下回る場合があります。（図1）。また、7月後半以降、ごく表層の水温が20℃を超える場合が見られます。7月下旬の7/30-31の調査船調査で湾口部40m以深に津軽暖流水（水温6℃以上、塩分33.6以上）が分布していましたが（噴火湾環境情報No.4参照）、7月の沿岸域の調査では確認されていません。

なお、昨年度東で大きな問題となったカレニア・セリフォルミスや昨年室蘭港で赤潮を形成したカレニア・ミキモトイなどホタテガイにとって有害な可能性がある赤潮プランクトンは検出されませんでした。

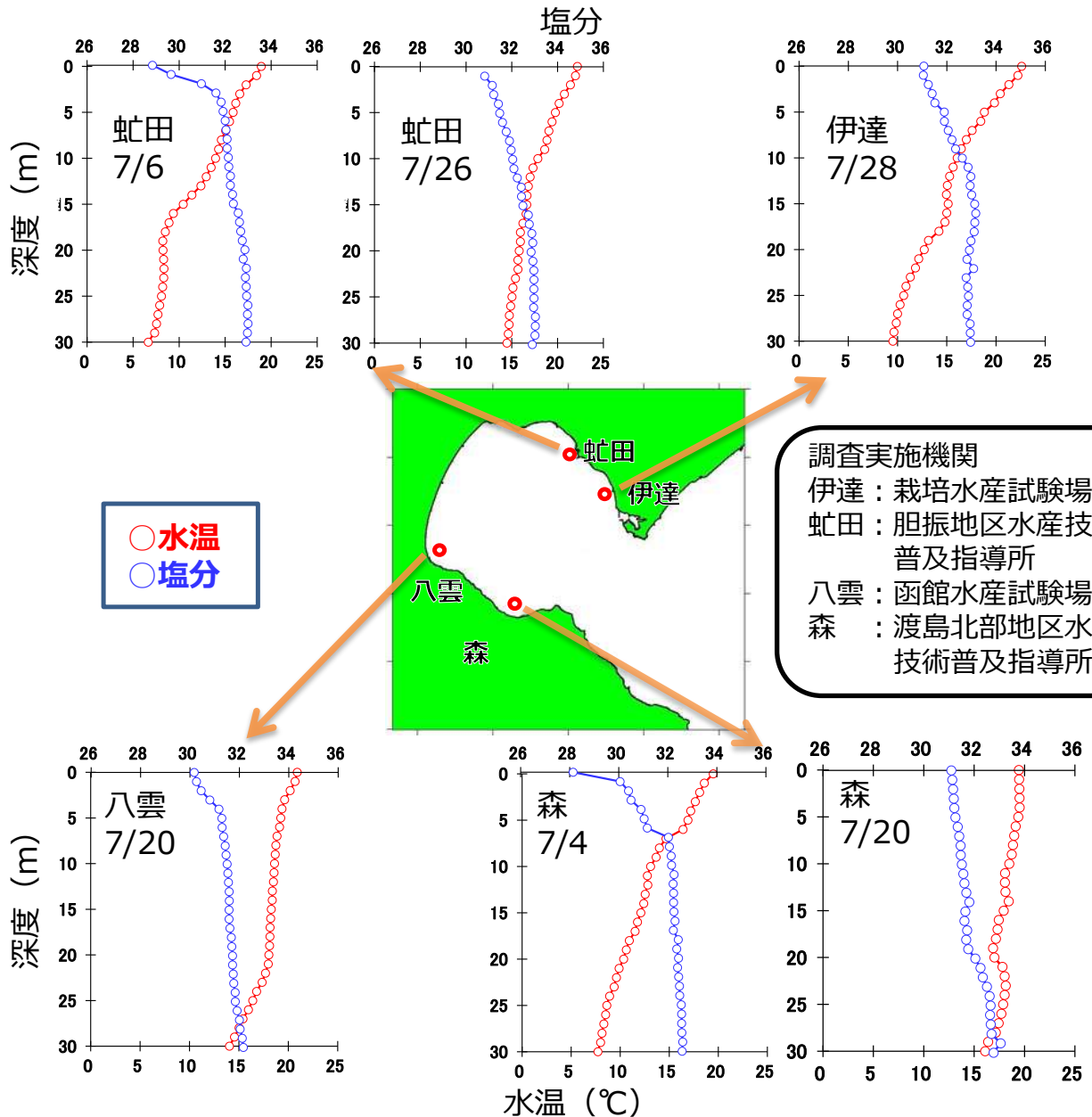


図1 噴火湾沿岸の水温・塩分の鉛直分布

※本調査の一部および情報配信は北海道ほたて漁業振興協会からの委託研究により実施しています。

## 【ホタテガイ養殖関係者向け】

### 【養殖ホタテガイの「稚貝のでき」と夏季の環境条件について】

夏季の水温・塩分の鉛直分布について、「稚貝のできが良かった年」と「稚貝のできが悪かった年」を比較しました（図2，3）。

8月後半の水温・塩分の鉛直分布に明瞭な差が生じています。 稚貝のできが悪かった年は8月後半の水温，塩分ともに深度による差が小さく，成層が弱い条件になっています（赤矢印）。この「成層の弱さ」が，「稚貝のでき」とどのような因果関係にあるのかは，まだよく分かっておらず，2021年のように8月後半の成層が弱い年であっても稚貝のできが良い年もありました。しかし，少なくとも過去の稚貝のできが悪かった年と似た環境条件が確認された場合は，その後の管理方法や作業方法には例年以上に注意を払うべきだと考えられます。

8月の各地区の水温・塩分の鉛直分布については，9月上旬に噴火湾環境情報でお知らせする予定です。

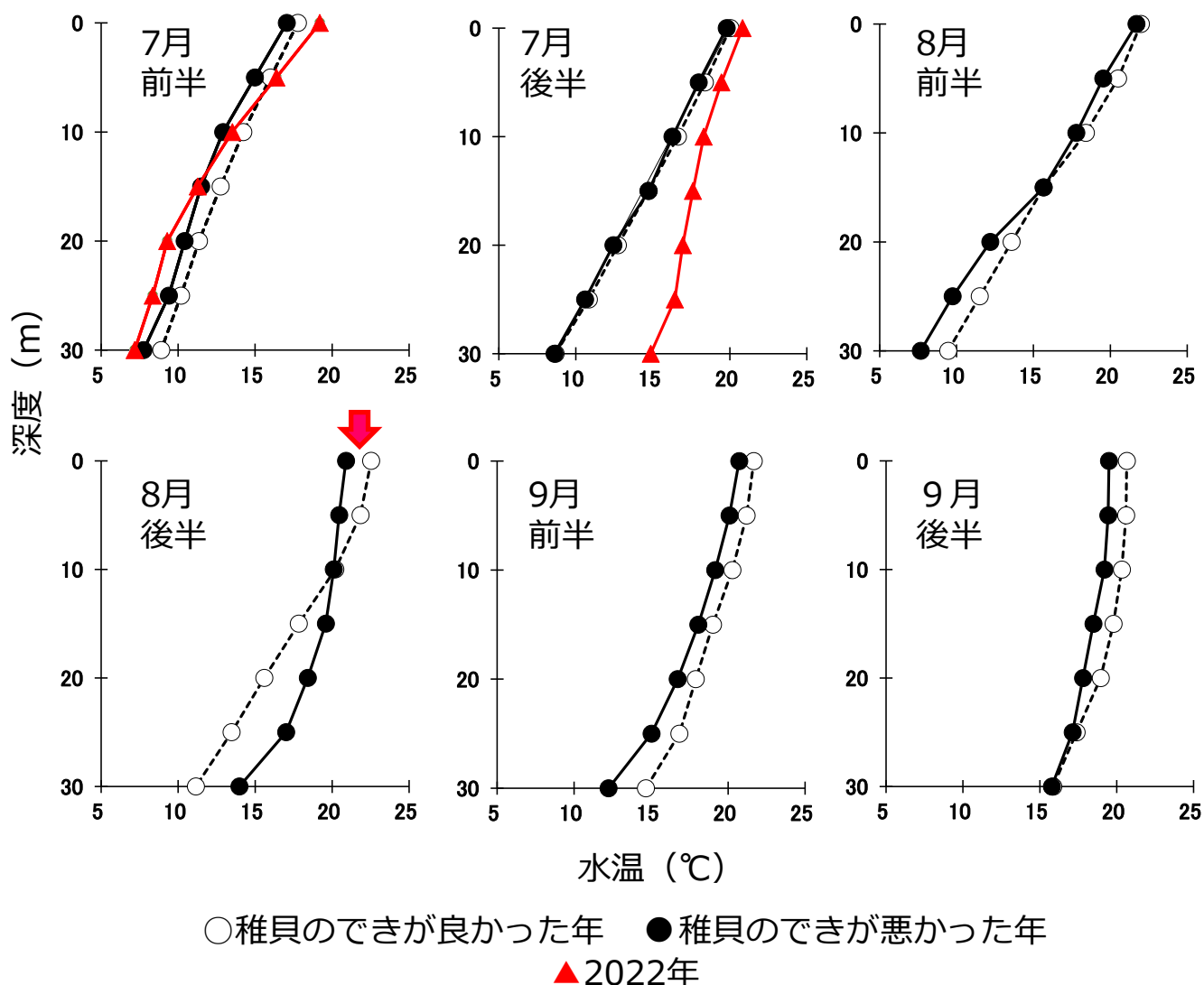


図2 噴火湾沿岸の夏季の水温鉛直分布  
2010年～2021年，虻田，八雲，森地区の1～2回/月の観測結果を各年各月の前後半の深度別で集計した上で，稚貝のできが良かった年，悪かった年の平均値を示しています。

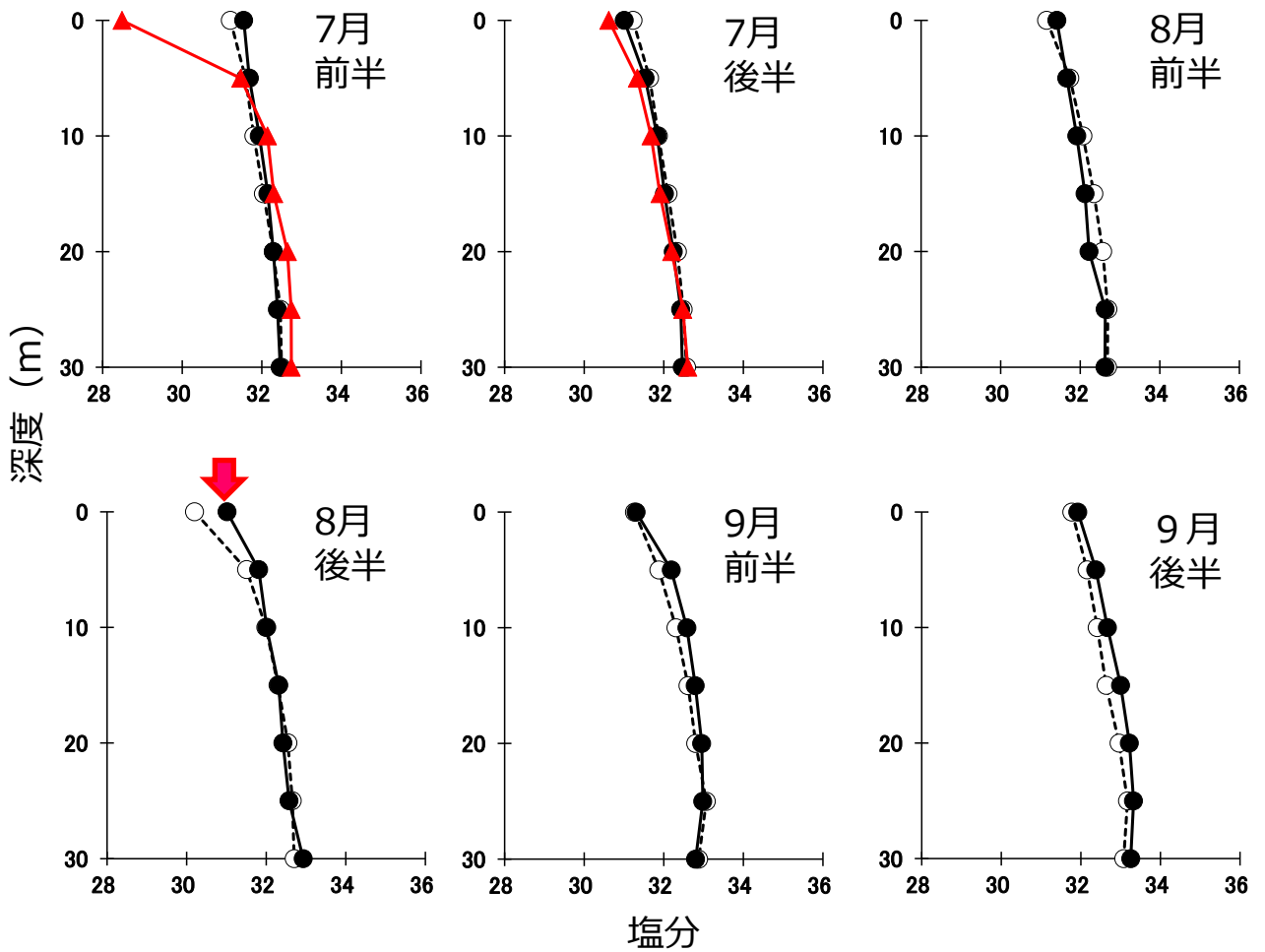


図3 噴火湾沿岸の夏季の塩分鉛直分布

2010年～2021年，虻田，八雲、森地区の1～2回/月の観測結果を各年各月の前後半の深度別で集計した上で，稚貝のできが良かった年，悪かった年の平均値を示した。

○稚貝のできが良かった年

翌3月の稚貝の正常貝率が80%以上の年：2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2016, 2020年, 2021年

●稚貝のできが悪かった年

翌3月の稚貝の正常貝率が80%未満の年：2015, 2017, 2018, 2019年

※翌3月の正常貝率は渡島北部地区水産技術普及指導所の調査結果を参考とした。